

ヒチコック (1)

根室市外三郡医師会
町立別海病院

やまうち おさむ
山内 修

ヒチコックには「黄金の十年間」¹⁾があるようです。確かにこの10年間は傑作が多いので、列記してみましょう。①ダイヤルMを廻せ! (1954)、②裏窓 (1954)、③泥棒成金 (1955)、④ハリリーの災難 (1956)、⑤知りすぎていた男 (1956)、⑥間違えられた男 (1957)、⑦めまい (1958)、⑧北北西に進路を取れ (1959)、⑨サイコ (1960)、⑩鳥 (1963)、⑪マーニー (1964) です。

この時期に何があったのか、本格推理小説家の島田荘司氏は3枚のカードを使い考察しています¹⁾。1枚目のカードは撮影監督 R・バークス。「見知らぬ乗客 (1951)」からヒチコックと仕事をしていますが、カラー作品になってから力を発揮し①を撮ります。⑨は白黒映像にて他者が撮影監督になるも、⑪までヒチコックと一緒にしました。

次の2枚目のカードは、フィルム編集者 G・トマシーニ。②～⑪において撮影した長いフィルムを、軽快なテンポに編集していきます。そして3枚目のカードは、音楽家 B・ハーマン。指揮者でもある彼の素晴らしい才能と④で出会い、⑪までヒチコックの魅惑世界を音楽表現します。ちなみに⑩は無音楽作品ですが、音響アドバイザーとして担当。

以上が島田氏の3枚のカードですが、私はさらに渡辺氏の論評¹⁾から4枚目のカードを見つけました。衣装担当の E・ヘッドです。彼女は「汚名 (1946)」で一度仕事をしますが、②から遺作の「ファミリー・プロット (1976)」まで組んでいました。

これら4枚のカードが揃った作品⑤⑥⑦⑧⑩⑪が、「黄金の十年間」の中でもヒチコックの絶頂期なのでしょう (④は補足参照、⑨は別格的な作品)。

今回は、⑤の「知りすぎていた男」について書いていきます。これは「暗殺者の家 (1934)」のリメイクで、両者ともに原題はThe Man Who Knew Too Muchです。射撃の達人役を⑤では、歌手だった女性に替えて登場させます、D・デイです。

彼女の歌う「ケ・セラ・セラ」は本作品の重要な伏線になっています。デイはこの子守歌を、初め嫌っていましたが²⁾。ヒチコックは何とか説得して歌わせたようです。曲は幸運にもデイの代表曲になり、その後ハリウッドの大スターになっていきます。しかし、ある事件をきっかけに一時引退します。「シャロン・テート事件」です。

映画「ローズマリーの赤ちゃん」(1968)で成功した R・ポランスキー監督は、ロサンゼルスに引

越します。そこでパーティを開いていた妻で女優の S・テートを含む4人が、カルト教団マンソン・ファミリーに襲われて惨殺されました (1969)。テートは妊娠8か月で子宮も裂かれていたようです。

ここでファミリーの首領 C・マンソンは、襲う相手を間違えていたのです。彼が狙っていたのは、音楽プロデューサーの T・メルチャー、デイの息子です。メルチャーは、事件の1週間前に引っ越しをしていて無事でした。彼の母・デイは一人息子が殺されたかもしれない事件のショックで、全く声が出なくなったのです³⁾。その後彼女はペットの愛護施設などを経営し、2011年にアルバムを久々に発表。2019年に死去しました (享年97歳)。

また⑤を、G・ケリーと決別するため意図的に作った、と見る人もいます⁴⁾。ヒチコックはケリーを①②③で起用しました。当時は「今後の自分の全作品をケリー主演で撮りたい」と公言していたようです⁵⁾。ところが、モナコ公国レーニエ大公と結婚して引退してしまったのです⁶⁾。⑤の中で、ホテルの新聞売場に「パリ・マッチ誌」が置いています (約42分経過時)。その表紙がモナコ公妃とのこと。故に⑤は、映画の中で男性を魅了するケリーよりも家庭的な母親役デイを前面に押し出した、「さらばG・ケリー!の映画だ」⁴⁾と云う人もいます。

さて次は、どの作品を知りすぎてみましようか。

(参考・補足)

- 1) KAWADE夢ムック「文藝別冊 ヒッチコック」(2018)の132頁と170頁。
- 2) D・キャスパー+NHK「ハリウッド白熱教室」(2015)。
- 3) 大日方俊子著「音楽奇談 今だから語れる本当の話」(2012)。
- 4) 山田宏一著「ヒッチコック映画読本」(2016)。
- 5) シネアルバム129「ヒッチコック ヒロイン」(1991)。
- 6) ④を③の直後に撮るが、ケリー喪失のためかヒットせずに玄人好みの作品。

